

『オデュッセイア』における風景

— 「見る」と「語る」 —

伊藤照夫

I

『オデュッセイア』はひとりの帰国者の物語である。その意味で本質的なモチーフともいえるものは「望郷」であり、これが物語をたえず駆りたてる。オデュッセウスが帰国を忘れてしまえば、物語も丸一年キルケーの館で停頓する(10.469)^{<1>}。部下に催促されてはじめて望郷がよみがえり、物語は進展する(10.471ff.)。カリュプソーのもとでは幾年月、苦悩の日々を送っているが(1.49f.)、これはカリュプソーにあきたらぬ今となつてのことで(5.153)、その以前の数年間は、キルケーの場合と同じように、うかうかと帰国を忘れていたことであろう。物語は停滞していた^{<2>}。そしてカリュプソーにあきたらなくなつてからは、その屋敷から遠ざかった海辺に出て悲嘆にくれる毎日となり、望郷がすでに帰国へむけて出発の準備をしている^{<3>}。あとはカリュプソーが贈物を与え、故国への方角を教え、帰国の便宜をはかつてくれれば、物語はまた進展するはずである。そのカリュプソーの贈物と教示にみられる親切は、「望郷」と共にこの作品の本質を決定するもうひとつのモチーフといえよう。山羊の島から見るとキュクロープスの島には人声もするし、人煙の立つのもみえる。かくしてオデュッセウスの一行はその島へ渡ることになるのだが、なによりもキュクロープスたちが客をもてなす礼儀を心得ていて、あるいは贈物でもくれるのではと思ったからである(9.176, 229)。パイエーケス人に迎えられたオデュッセウスの運命を、ゼウスはヘルメースにこう言う。「彼等はオデュッセウスを神のごとく心から大切に扱い、…青銅、黄金、衣類の数々を贈った上、船を仕立てて懐しの故郷へ送り届けてくれるであろう」(5.36-40)。異国の者をもてなし、贈物を与えて送り出すという、客を遇する礼をわきまえていること、つまり

「客もてなし」が第二のモチーフである。

帰国者の体験する遍歴とは、この客もてなしを求めて異国をさすらうことにほかならない⁴⁾。人煙の立ちのぼるのを望み、胸を躍らせて近寄っていく。この反復が帰国そのものであり、客もてなしの変形または障害が冒険となる（キュクロプスの物語、アイオロス及びライストリュゴネスのエピソードなど）。求婚者たちとテーレマコス、乞食に身をやつしたオデュッセウスと求婚者たちのそれぞれの場合にも、このもてなしの変形が介在する。デーモドコスとパーミオスのふたりのアオイドスにも、呼ばれて迎えられるアオイドスとしての生き方にこのモチーフは重大な意味をもつ⁵⁾ように、迎えられてもてなされるべき側は、自分たちの生存そのものから生きる意味にまでこれに深くかかわらざるを得ない⁶⁾。そしてとくに帰国者オデュッセウスは、つねに望郷につきうごかされて生死の間をゆれうごき、いわば生身の欲望がむきだしとなって異国の地をめぐるゆく。つねにたえずその異国の地を眺める。生きつづけるためのもの、客もてなしを得ようと、人の声と立ちのぼる煙を求めて周囲の景観を見る。言葉をかえれば、その風景は人間との緊密な関係において眺められているはずである。

II

アルキノオスがオデュッセウスに、いったい何処から来たのかと訊ねたとき、オデュッセウスは誇らしげにイタケーの島を語り、その姿を具体的にこどこまかく説明する。それは故国の讚美であり、故国への深い愛着の念を語ることでもあった(9.21-36)。このいわば「お国自慢」はアルキノオスのごくありふれた質問への返答としては予想外の詳細さといわねばならない⁷⁾。その詳細さは、望郷の念すでに抑えがたいオデュッセウスならではのことであり、望郷の念と故国への愛がイタケーの島の詳細で生き生きとした景観描写となって具体化されている。お国自慢はその自然景観の讚美なのである。イタケーの風景こそがつねにオデュッセウスの心を引き寄せつづけ、トロイア戦争の英雄オデュッセウスを帰国者⁸⁾に仕立てあげている。そしてカリュプソーもキルケーもついに自分を引きとどめることができなかつた、と

オデュッセウスが語る時、オーギュギーの風景もアイアイエーの風景も「故国より以上に見て楽しい」（9.28）ものではなかったということである。望郷に駆られる帰国者の目は、まさしく正常にはたらいっていた。

行き着くさきざきの土地を眺め、風土を目で確かめ、自然景観にたえず注意を払う帰国者にとって風景を見ることは生存の証であり、生存の条件であった⁹⁾。帰国者オデュッセウスが風景を見ているのは、もちろん第一人称の形式で自ら冒険談を語る時に現われる。「一人称物語なくして風景なし(Ohne Ich-Erzählung keine Landschaft)」という、とかく批判の矢面に立たされがちな Reinhardt の提言は、やはりあらためて検討するに値するはずである¹⁰⁾。たしかにオデュッセウスの一人称で語られる部分ではなくても景観描写はいくつかみられる。たとえば、イタケーの島に到着したことに気づいていないオデュッセウスにアテーネーがその島のありさまを語って聞かせる第13歌の 237-249 は、前述の第9歌でアルキノオスの質問に答える場合よりもいっそう詳細であり、ホメーロスの叙景のよい見本といえよう。ここでもイタケーの名を知らぬ者はいないことが強調されるが、もはやお国自慢ではない。遠方から到着した者を迎える側の配慮のあらわれであろう。その名がトロイエーにまで響いているのは、ここイタケーが安らかで豊かな生活の保証されている土地であればこそであり、長い漂泊にあけくれたオデュッセウスのさすらいに終息を与えるにふさわしい土地だからである。そしてさらにそれにふさわしい風景が叙述されるための詳細さにほかならない。岩が多く狭い土地ながら穀物も葡萄もよく育つ肥沃にくわえて「四時絶えることなく、雨と豊かな露が潤している」（245）。山羊や牛を飼うにも適しているし、あらゆる種類の樹木が繁茂し、涸れることのない給水場もあるのだ。このような描写に牧歌的な特徴が指摘されることもあったが¹¹⁾、そこまで形式化されているかどうかは別にして、たしかに安息を約束する平穏さをとくに強調する叙述であるといえよう¹²⁾。さらには、ある程度は理想化されてもいるであろう。当然のことながら、これは一人称の語り手オデュッセウス自らが見た体験としてではなく、第三者によって語られてこそ意味をもつことになる。しかも、オデュッセウスがついに故郷のイタケーにたどりついたという、このシチュエーションでのことであればこそ意味をも

つものと考えられよう⁽¹³⁾。つまりその叙景もその詳細さもこのシチュエーションによって可能となっている。もうひとつ例を挙げてみよう。

ナウシカアーはオデュッセウスを父の屋敷へつれていくために、次のように説きすすめる。「異国の人よ、一刻も早く私の父に送って貰い、帰国したいのなら、今は躊躇せず、心して私のいうことをお聴きなさい。やがて道のわきに、アテネを祀るポプラの美しい森が見えます。森の中には泉が湧き、まわりは牧場です。ここに父の料地と見事に茂った果樹園があり、町から呼べば声の届くほどしか離れていません」(6.289-294)。ナウシカアーはこういうと町へむけて出発し、オデュッセウスはそのあとにつづく。「陽の沈む頃、一行は名高いアテナイエの森に着き、勇士オデュッセウスはここに腰をおろしたが、直ぐに大神ゼウスの姫御子に祈願して…」(321-323)。つまりアテーネーを祀る森が二度くりかえして言及される。そして前者の場合が詳細な描写となっている。いうまでもなく、異国の者には土地の案内は詳しいほうがよいにきまっている。まず「道のわきに」は、町へむかう道との位置関係から森の所在を知る手がかりとなるであろうし、「ポプラの美しい森」はまちがいなくランドマークであり、道しるべとなる。しかし、「森の中には泉が湧き、まわりは牧場です」は、土地に不案内なオデュッセウスに森の所在を教えるだけなら必要なことではない。むしろ余分なことであろう⁽¹⁴⁾。だがこの余分は無意味ではない。それにつづくアルキノオスの「料地」と「果樹園」を呼びだすための、ひいてはオデュッセウスが坐って待つことになる場の説明となっているのである。ナウシカアーは森の中の泉のほとりに坐って待てと言った。その森のまわりに牧場があり、さらに料地と果樹園が森をかこむようにひろがっていた。すなわち、これは坐って待っている場所の所在を示すのではなく、その場所の状況を示している。声の届くほどしか離れていない町との距離的な近接は、そのままオデュッセウスの願望がかなえられる可能性の近接感となる。異国の、しかも保護を求めている人物を受け入れ、保護を約束したナウシカアーであればこそ、このように場所を語り、その自然景観を詳細に描写するのである。こうしてオデュッセウスの待機する場はすべて明白となった。ナウシカアーを先頭にしてその森へ着いたとき、オデュッセウスをあとに残して一行は町へと急ぐ。オデュッセウ

スはそれからどうするのか、何をするのか。関心はこれに集中する。「勇士オデュッセウスはここに腰をおろしたが」、その「ここ」とは、あらかじめナウシカアーに教えられてあった森の中の坐るべき場であり、そこに腰をおろせば「直ぐに」アテーネーに祈願するだけであろう。この二度目のアテーネーの森についての言及は、女神に祈る姿を語るだけでよかったのである。

ナウシカアーであるにせよ、ホメーロスにせよ第三者による叙景は、一定のシチュエーションと人物設定が条件となっている。そして風景そのものは、このようにかなり高度に整合されたものといえるであろう。

III

オデュッセウスの一人称で叙述される風景は、かれ自身によって体験された景観としての風景といえよう。アイアイエーの島で、「人間が働いているしるし」が見られるのでは、そして、人の声が聞かれるのではと思ひ(10.147)、オデュッセウスは奥地へはいり岩だらけの高みに登る。そこで見たものは、密林の茂みを通して立ちのぼる煙であった(150)。そしてその赤味をおびた煙しか見ていない。密林をなす森は、視野を妨げるものでしかなく、その煙が立ちのぼるもとを覆い隠すものにすぎない。そこにキルケーの館があるはずである。部下を偵察に派遣するが要領を得ず、かれひとりで赴くことになる。その途中で見たものは、「なんとなく神秘的な気分のする山間」(275)という情景だけである。深い森は豪華なキルケーの屋敷をとりまき、人目を避けるためにしかない。「道すがらさまざまの想いで心は乱れるばかり」(309)となるのも、この森のために気骨の折れる道中であつたからである。それだからこそ突如現われるヘルメースに「気の毒なお人よ、土地不案内の身でありながら、たったひとりで山中を歩いて」(281f.)と同情されるわけであつた。偵察に行った部下のエウリュロコスから聞いている不思議な女が念頭にあるために、オデュッセウスはあたりの景観から神秘的な気分をかぎとっているが、ついにこの森からは何も見ていない。依然としてそれは、期待の昂るままに、ただキルケーの館を隠すものでしかなかった。もっともこれより少し前に、かれはこの森で牡鹿を得てい

た。それは「いずれかの神が憐れと思われたのでであろう」(157)ということであったのも、山羊の島において「アイギス持たすゼウスの姫御子、ニンフたち」が山羊を追いたててくれた(9.154)のとまったく同じありさまである。山羊の島は、自然そのものであり、人間の働いているしるしなどまったくなく、文化や生活の基盤なども存在しない。むしろその可能性が放置されたままの状態にある¹⁵⁾。キルケーの屋敷をとりまくこの森もそれと同じであった。生活という面からすれば、不毛の地であり、神の憐れみから食料を得るしか生存の道がないのである。オデュッセウスがこの森から何も見ないのはそのためであり、したがって生存を保証するはずのキルケーのもとへ引き寄せられるだけである。山羊の島からキュクロプスの島に立ちのぼる煙を認め、話し声を耳にするや(9.166f.)、あれほどまでもこの島のたたずまいに感嘆していたのにもかかわらず、たちまち対岸に見える島への思い入れが強まる。そして、まず人の住むことと文化の存在することを期待して、オデュッセウスの視線はひたすら彼方の島へ引き寄せられていく。

オデュッセウスが見たキルケーの屋敷からあがる煙の叙述(10.146-150)は、翌朝部下たちにこの島のありさまを語ってきかせるときに反復される(194-197)¹⁶⁾。ここで自分の目で見たままのことを語る前に、このような苦境にあつて何かよい算段はたてられないものかと思案したが、「どうもそういう知恵は浮かびそうにない」(193)と言つて、*polymētis* たるオデュッセウスもいまここに至つて *mētis* がまったくないと告白している。これはたしかにただの *ein Spannungsmoment*¹⁷⁾ にすぎないにしても、このように不安と緊迫感を盛りあげておいて自分の目で見た島のありさまをすぐにつづいて語るとき、それはそれなりの臨場感を与え、聞きいる部下たちには心理的な効果さえも予想させるのである。事実、たちまち部下たちは、ライストリュゴネスのこと、人喰いのキュクロプスのことを「今更ながら思い出して、すっかり意気銷沈してしまった」(198-200)。これほどまでも迫真的な効果や心理的な効果をもたらした原因は、いうまでもなく「茂みから上る煙を見た」ことである。ライストリュゴネスやキュクロプスの住む国で最初に見たのがあの立ちのぼる煙であった。これら体験された景観に共通する「人煙」こそ帰国者が求めていかねばならないものであるだけに、それを

いまここにまた見たことは、その景観から体験したことを再体験することにほかならず、もはや意気銷沈するしかない。オデュッセウスが万策尽きたと感じたのは、自分の目を見た自然景観そのものであった。そのことは茂みから立ちのぼる煙を部下に語る部分（194-197）の冒頭に eidon gar と理由づけていることから明らかであろう。また、偵察の指揮をとらさせられたエウリュロコスの臆病と用心深さもこの景観と緊密に結びついている¹⁸。立ちのぼる煙をたよりにライストリュゴネス人の町へ偵察に行くときとまったく同じ状況を、いまエウリュロコスは体験しているのである¹⁹。語り手（及びエウリュロコス）が自身で体験したことであるだけに、この「見る」とその風景には、三人称の語り手では言い尽くせない現実感、当人の息づかいさえ感じさせる。そしてあえて言うならば、風景は見られることによって生きてくる。

IV

オデュッセウスによって見られたアイアイエーの島に対して、ホメーロスによって語られるオーギュギーエーの島では、カリュプソーの洞窟をとりかこむ森は、樹木の種類がいくつか挙げられ、それぞれの繁茂のありさまが述べられる。泉のまわりに花の咲き栄える草原がひろがり、葡萄の枝²⁰には熟れた実がたわわに垂れさがっている（5.63-73）。すべて成長と開花と繁茂に溢れ、それに対する喜びが語られる。神でさえもこの森のありさまを眺めて喜ぶのである。そして、この森には有用な樹木が茂り、オデュッセウスはこれらを利用して筏を作り、帰国の途につくはずである。実りの豊かさを約束するこの森には、文化と生活を成りたたせるべく描写するというホメーロスの意図も透けてみえる。これは第7歌のパイエーケスの人々の国についてのホメーロスの描き方にもあてはまることで、アテーネーの森の叙景は前述のとおりであるが、アルキノオスの屋敷もカリュプソーの場合ととくに比較されるべきであろう。オデュッセウスを故国へ送りどけるようにパイエーケスの人々はゼウスによって定められている。したがってかれらの住む国は、帰国にいささかも疑念を起こさせないように描かれる。オデュッセウス

のために万端準備されていなければならない。アルキノオスの宏壮な屋敷は、その生活ぶりの精細を極める描写から、陽光と月光に照らされたように輝きわたっている（7.84-111）。ことに庭園（果樹園）は、カリュプソーの洞窟をかこむ森とかかわるところがない（112-131）。ホメーロスの叙述は克明かつ巧妙である。そしてこれをオデュッセウスに眺めさせ、カリュプソーの森のヘルメースと同様に、感嘆させる。だれもが「眺めて驚嘆する」こと *thauma idesthai* ^{<21>}こそ、ホメーロスの景観描写のすべてなのであり、景観の理想化の重要なよりどころなのである。その場面にはそれを眺める人物が不可欠であること ^{<22>}はいうまでもない。オデュッセウスが一人称で語る部分ではこれが脱落し、すべてがかれの「見る」という体験となる ^{<23>}。

表現上では精細な詠物の羅列の体裁をとり、そのために豪華と豊饒を基本にして珍貴と摩訶不思議を強調し、精細さが驚嘆の度合に比例させられているような景観は理想化されたものであるとすれば ^{<24>}、ホメーロスによって整合された風景として既述した第6歌のアテーネーの森や第24歌のラーエルテースの農園 ^{<25>}も、理想化の類例とみなすことができよう。理想化された景観は、ホメーロスの整合の結果としてそれ自体がいわば記号化されて実体をもたないものである。この実体をもたない風景は、ホメーロスによって語られることによって生ずる ^{<26>}。つまり語られた風景といえよう。そしてホメーロスは風景を見ない、ただ語るだけである。ホメーロスによって物語が語られるとき、叙景はあっても風景そのものは存在しない。

『オデュッセイア』はメールヘン的な冒険物語を基盤にしているが、その自然景観の描写をメールヘン的なものと写実的なものとに截然と分つことは現在ではおおむね否定されている ^{<27>}。カリュプソーの洞窟の周囲やアルキノオスの庭園はいかにもメールヘン風に理想化されていても、めりはりのきいた写実の手法で描かれている。驚嘆の対象として珍貴と摩訶不思議が目に見えるように活写され、聴衆に強くアピールされねばならないとすれば ^{<28>}、必然的にリアルな叙述に偏らざるを得ないからである。

ホメーロスがオーギュギーエーやスケリエーを描くとき、その日常の生活の全般、つまり日常性が理想化されている。オデュッセウスによって眺められた山羊の島やアイアイエーでは日常性が排除されて非日常化し、景観のもつ

自然と野生は冒険の対象へと相対化されていく⁽²⁹⁾。オデュッセウスの求めてやまない立ちのぼる煙は、生存を保障する日常性そのものであった。非日常化された景観の中にひとすじの日常性が確保されれば、たとえ一時的であれ冒険は消え去る。さらに帰国の途につくことがゼウスに定められれば、カリュプソーの島は理想化された。オデュッセウスは理想化された日常のレベルで神々の庇護のもとにある。ホメーロスはこれをとくに強調する。こうしてオデュッセウスはもはや風景を見るには及ばない⁽³⁰⁾。ホメーロスの叙述がかれを故国へ運んでいくのである。

V

闇夜ながら幸運にも山羊の島に上陸できたものの、島の様子は皆目わからぬままにオデュッセウスたちはその場で眠った。一夜明けると、「われらは島のたたずまいに感嘆しつつ、島中を廻っていた」(9.153)。島のたたずまいを眺め、オデュッセウスはしきりにこの島を賞讃する。第9歌冒頭でアルキノオスに問われるままについに口に出したあのお国自慢と同様に、島への賞讃はそれを見るオデュッセウスその人の現実、身の置かれているありさまと密接に結びあっている。ロートパゴイ人の住む地をほうほうのていで逃れ、暗い気持でこの山羊の島に来て一夜を明かしたかれの現実が自分を現在とりかこんでいる自然の景観を眺めさせている。「現在」とそれを包みこむ景観は、それを眺める「現在」のありさまに決定され、規定されるとすれば、眺める景観そのものが選択されることになる。それではオデュッセウスの現実が山羊の島のたたずまいのいかなるところを選択して眺めていたのか。いうまでもなく、それは125-140でオデュッセウスがこの島の生活の可能性に思いをめぐらせているところに知られる⁽³¹⁾。これはこの時点におけるオデュッセウスの、かくあれかしと願ってやまぬ幻想の所産といえよう。しかし結局その生活の不可能を知るところから徐々に日常性が排除され、前述のようにかれの目はキュクロプスの島へ移っていく。

目で見られたものが語り手の現実と深く関与しているからには、山羊の島を「純粋な風景」⁽³²⁾とよぶこともできるかもしれないが、山羊の島に限ら

ずオデュッセウスによって体験された風景は実体のある、むしろ実体を如実にさらけ出す風景である。この日常性を負う風景は、記号化されて実体のないホメーロスの語られる風景と峻別されるべきであり、見られる風景、見られることによって生きてくる風景そのものにほかならない。一人称の語り手による物語なくしてあり得ぬ風景とは、このようなものであろう。

風景をとらえるのは、人間存在の基体としての身体の一器官である目であり、とらえられる風景はその位置やそこでの状況によって異なってくる。現在そしてここにある自分自身が、自分の身体だけが景観をとらえ、その認識にかかわっているという意味で、風景の属性のひとつとして「風景の身体性」^{<33>}をここに援用することが可能であるとすれば、一人称形式の叙述と風景の相関は、Reinhardt とは同一の方向をとらないにしても、あらためて強調されるべきであろう。そしてその「身体性」の表現こそが一人称の語りのもつ固有の力であり、はたらきである^{<34>}。

『オデュッセイア』の叙景に欠かせられない道具立てに洞窟、森、泉そしてニンフたちがある^{<35>}。もともと民間信仰の遠い記憶がそこに反映していたのであろう。人々のイメージはそのような場所に結びつけられ、おのずから視線はそのような場へむかうことになる。非日常性をその本質のひとつとするホメーロスの景観描写は、まさしくこの視線から生まれ出たものと想像される。その例証のひとつにポルクユスの入江の叙景(13.96-112)^{<36>}が挙げられる。その入江にオデュッセウスは眠ったままで到着し、そこでアテーナーによって故国という現実の世界へ引きもどされる。しかし現実の世界とはいえ、入江は景観的特徴をもって描かれていても、むこうに聖なる(hieros)オリーブ樹、こちらにニンフたちの洞窟というように、景観的特徴はいずれもメルクマールでしかなく、それら自身は意味を与えられていない。つまり風景を構成しない^{<37>}。もちろんオデュッセウスは、なにひとつ「見て」いない。つまりホメーロスによって語られた風景でしかない。

しかし、他方ホメーロスによって語られていながら、あたかもオデュッセウスの目にしたものがそのままその時点のかれ自身の現実に関与しているようにみえる場合がある^{<38>}。それはオデュッセウスがパイエーケスの人々の住む地に漂着し、やがて救われるまでの一連の場面である。叙景とは必ずし

もいえない点もあるけれども、これはどういうことであろうか。そのように見えるのは、漂着の前後に頻出するオデュッセウスの独白³⁹⁾ (5.298ff., 355ff., 407ff., 6.118ff.) がきわめて効果的に作用している。すなわち独白のひとつひとつがその都度の情況描写となってホメーロスにそれぞれの場面を語らせ、しかもそれぞれの場面の特徴や性格を規定さえしているように見えるからである。独白がすべてオデュッセウスの一人称であればこそ、それだけいっそう「現実」が明快に印象深くホメーロスの語りの中へ滲出している。これをも一人称の叙述形式のもつ固有のはたらきとみなすべきであろう。

風景が装飾としての添え物でしかないという Elliger の主張⁴⁰⁾ は、もはや『オデュッセイア』に関する限り否定される。むしろ風景は見られることによって生きてくる。それを眺める人物をも生き生きと描き出さずにはおかない。風景を見ることにより、または体験することによりその風景と見る人物とが映発しあい、聴衆に鮮明なイメージを結ばせる。そして風景を見るのはオデュッセウスだけである。ホメーロスは風景を語る。いわば適材適所に叙景を利用するのがホメーロスであり、筋の展開に応じて、あるいはシチュエーションの制約に応じて景観を叙述するのである。ときには理想化していっそう的確に物語の中へ配する。ホメーロスが風景を語る時、すべて整合させられた叙景となる。

VI

オデュッセウスの語る長大な物語にはくらべるべくもないが、同じ「帰国者」メネラーオスが第四歌で語るパロス島のエピソード (351-586) は、語り手の一人称形式のもうひとつの例として比較できる唯一のものであろう。ここで問題となるのは、メネラーオスの語るパロス島 (354-359) に自然景観の描写がないことであり、なぜメネラーオスはパロス島の風景を見ていないのかということである。これはパロスの島の地誌的な説明がなぜあのように詳細なのか、ということにも関連する⁴¹⁾。たしかに 351-353 で十分であったはずなのに、いかに典型的⁴²⁾とはいえ 354 行以下のトポグラフィ

一的な説明は余分なもののようにみえる。このエピソードそのものは、メネラーオスがエジプトのある場所に滞留したこと、かれがプロテウスから帰国について教えられること、この2点にすべて収斂される。聴衆がこのエピソードから知りたいと思っていることがこの2点なのである。メネラーオスとプロテウスが共にエジプトと古くから関係があり⁴³、パロス島という現実にはそぐわない実在の地名などでなく、エジプトにある地名ならなんでもよかった⁴⁴。しかもパロス島滞留は、メネラーオスの帰国がアイギストスに対する復讐にまにあわなかったことを理由づける機能をもち、エピソード全体は『オデュッセイア』以前から伝承されて叙事詩の伝統の流れにくみこまれていた⁴⁵。語り手メネラーオスには、この叙事詩の伝統の要求するトロイア戦争の英雄メネラーオスとしての一人称しかない。かれには「帰国者」としての一人称はあり得ない。したがって、かれがパロスの島の自然景観を眺めることはない。トロイア戦争の英雄として故国へ帰るべくパロス島に20日間滞留し、プロテウスの教示を待つ場を叙事詩の要求に随って語ればよいのである。一人称形式の叙述に固有のあのはたらきはここにはない。

オデュッセウスの一人称は、「帰国者」とトロイア戦争の英雄との両面をあわせもつ。『オデュッセイア』にとりこまれた民話の主人公として、それが本来三人称の形式で語られていたかどうかはとにかく、さまざまな冒険を体験したオデュッセウスと、『オデュッセイア』において初めて附与された属性としての英雄オデュッセウスとの二面性である。第12歌でかれはキルケーの警告のとおり英雄にふさわしく武装し⁴⁶、『イーリアス』の流儀に随ってスキュレーと相對する(226ff.)⁴⁷。また、セイレーンたちはトロイア戦争でのかれの武功を賞讃し、その戦争を語ろうと言う(184ff.)。するとかれは「私の胸は声を聞きたいという想いに溢れ」(192f.)と、デーモドコスの歌に涙を流す英雄オデュッセウス(第8歌)の片鱗をのぞかせる。この2例にしか英雄オデュッセウスの面影は求められない⁴⁸。したがって、一人称の二面性といっても、実質的には「帰国者」の体験を語る一人称でしかなく、その体験と共に鮮明に聴衆の眼前に浮かびあがってくる一人称だけである。

ところで、この語り手オデュッセウスの背負っている「帰国者」の物語

は、『オデュッセイア』にとりこまれたときに一人称の叙述形式にあらためられたのであろうか⁴⁹⁾。つまり原話の叙述形式が三人称であったのか、一人称であったのかだが、もちろんそれはほとんど立証不可能のことであろう。しかし体験を語る一人称のはたらきというささいな手がかりから、その推測の緒が得られるかもしれないのである。

セイレーンたちに対して、キルケーが「そなたのほかには誰も声を聞けぬように、…しかしそなたが自分だけは聞きたいと思うなら」(12.48f.)とオデュッセウスに言い、かれも部下たちに「ただ私ひとりはその声を聞けというのだが」(160)と言うとき、かれだけには許されていて、キルケーはむしろ聞くように勧めていたことになる。たしかにここで部下と同様にオデュッセウスが耳をふさいでしまえば、一人称の語り手による物語である以上、セイレーンたちの声とその魔力を体験することが不可能であり、冒険としての語られる意味を失う。まして語り手オデュッセウスは、いわば体験しつづける実存であって、何もかも体験しなければやまないのである。事実それゆえにこそ冒険がそこから生まれ、物語があらたまり、進展する。知りたいという欲求がそのような体験へ駆りたてる。ポリュペーモスの洞窟で略奪品を持って早く帰ろうと主張する部下たちに従わず、「私には巨人の姿を見たい気持があり」と告白するのも、贈物への期待のほかにも新奇なものを見聞しておきたいという、まさしく抑えがたい欲求がはたらいているからであった(9.228f.)。すなわち、かれは耳をふさいではならず、かれだけはセイレーンたちの声を聞かねばならない。このあまりにも明快な個性は、ホメーロスが「帰国者」の民話を一人称の叙述形式にあらためたことにより生まれたものなのであろうか。それとも原話の主人公の「帰国者」が本来すでに附与されていたものであろうか。オデュッセウスの一人称語りでしばしば指摘される一人称の矛盾と破綻⁵⁰⁾には、たしかにホメーロスが三人称形式の原話を一人称形式にあらためたとするほうが都合がよい⁵¹⁾。しかし、ただそれだけではこの語りの形式変換を立証できそうにないほど、「帰国者」の一人称が原話「帰国物語」にあまりにも密接に、むしろ正確に結びついてしまっているように思われるのである。

注

(1) ホメーロスのテクストは、T.W.Allen の校訂本による。また、『オデュッセイア』の邦訳として次のものを使用させていただいた。松平千秋『オデュッセイア』講談社世界文学全集1 (1982)。

(2) W.J.Woodhouse, *The Composition of Homer's Odyssey*, Oxford (1969), 48ff.

(3) キルケーに引きとどめられているオデュッセウスの辛苦のさまをアテーネーはゼウスに言う。「しかしオデュッセウスは、せめてのことに故国の土から立ち昇る煙なりと見んことを願いつつ、むしろ死を望んでいるのです」(1.57ff.)。

(4) 「さてさて、今度はどういう人間の国にきたのであろう。粗暴、野蛮な無法者たちであろうか、それとも客を遇する道を知り、神を怖れる心を持った人間であろうか」(6.119ff.)。

(5) これについては、拙稿「『オデュッセイア』におけるアオイドス——ペーミオスの不運について——」、『京都産業大学論集』外国語と外国文学系列 15 (1988), 171ff. を参照。

(6) cf. B.Snell, *Dichtung und Gesellschaft*, Hamburg (1965), 45.

(7) M.Treu, *Von Homer zur Lyrik*, München (1968), 104f.

(8) 「トロイア戦争の英雄オデュッセウスは、やがてメールヘン的な冒険と、帰国者の物語に結びつけられ、『オデュッセイア』の根幹が成立する」(岡道男『ホメロスにおける伝統の継承と創造』, 東京 1988, 87頁)。

(9) cf. W.Elliger, *Die Darstellung der Landschaft in der griechischen Dichtung*, Berlin (1975), 106.

(10) K.Reinhardt, *Von Werken und Formen*, Godesberg (1948), 77. 批判の主要なものは、Elliger, *op.cit.*, 147.; B.Hellwig, *Raum und Zeit im homerischen Epos*, Hildesheim (1964), 34.; U.Hölscher, *Die Odyssee. Epos zwischen Märchen und Roman*, München (1989), 192ff. cf. Treu, *op.cit.*, 102.

(11) Treu, op.cit., 105f. なお Treu はここで idyllisch と同時に klimatologisch な特色をも指摘し、抒情詩を先取りする革新的な景観描写であることを主張する。

(12) 第24歌で隠居生活を送っているラーエルテースが姿をみせてオデュッセウスと再会するのも、このような安住の地での平穏な生活を背景にしている。

(13) テーレマコスが三頭の馬を辞退する理由としてメネラーオスにイタケーの風土を説明する (4.602-608)。これはラケダイモーンの風土と比較までして的確に理由を納得させるようなイタケーの描写となっている。

(14) ein „ beschreibefreudiger “ Überschuss (Treu, op.cit., 107).

(15) オデュッセウス自身が山羊の島の自然景観を眺めて、野生と自然を人工と文化へ変換するための具体的な方法を解説する (9.125-140)。これは帰国者オデュッセウスのかくあれかしと願ってやまぬことの幻想でもあろう。すべて有用という尺度で測定されている幻想である。 cf. A. Bonnafé, Poésie, Nature et Sacré I, Lyon (1984), 150ff.

(16) この両者を比較すると、前者ではいきなりキルケーの名が初めから出されているが、これはオデュッセウスの一行が行き着くさきざきで、まずその地名や住民の名が挙げられていること (スケリエーの場合は例外) から説明がつくであろう。また、キルケーにまつわる説話を聴衆が熟知していて、それを前提に聴衆の関心をあらかじめ引きつけるためとも考えられる。したがって、部下に語る後者ではキルケーの名は出されない。

(17) Elliger, op.cit., 135.

(18) ibid., 135f.

(19) cf. W. B. Stanford, The Odyssey of Homer, London (1967), Comm. to 205-8.

(20) ēmeris は栽培された葡萄を意味する。

(21) この定句については、R. A. Prier, Thaumata Idesthai, The Phenomenology of Sight and Appearance in Archaic Greek, Tallahassee (1989), 91ff. これらの用例と類似するものに、感嘆の気持で「眺める」thēesthai があり、たとえば大きな鹿 (10.180) やポリュペーモスの洞窟に

溢れる乳漿とチーズ (9.218) のように、帰国者オデュッセウスの眺める対象が日常のレヴェルまでさがってきている場合に用いられている。cf. Prier, op.cit., 81ff.

(22) ヘルメースとオデュッセウスの目に映るものを語り手ホメーロスが自分の言葉で再現するという点も『オデュッセイア』の斬新さといえよう。cf. Hellwig, op.cit., 35f.

(23) Reinhardt, op.cit., 75.

(24) cf. Elliger, op.cit., 131.; Bonnafé, op.cit., 156ff.; G. Crane, Calypso: Backgrounds and Conventions of the Odyssey, Frankfurt am Main (1988), 15ff.

(25) ラーエルテースの農園は、実質的にアルキノオスの庭園とほとんどかわらない。それがオデュッセウスの目が捜し求める父の姿にいかにかわしいかを語ればよい、農園そのものの具体的な叙景は必要ではない。cf. Treu, op.cit., 106.; Hölscher, op.cit., 190.

(26) オデュッセウスが一人称の語り手となっているにもかかわらず、自然景観が理想化されている例がひとつある。キュクロープスの島を遠くに望み、まだ実際に見ていないのに「種も蒔かず耕しもせぬのに何でも育つ…ひとりでに生え、…すくすくと育つのだ」(9.109-111)と語る。これはいわば潜在的な豊饒と巨大な可能性をもつヘーシオドス (Erga, 117f.) 的な理想境で、むしろヘールヘンのようなべきであろう (cf. 4.565ff., 6.42ff., 7.119; B.Gatz, Weltalter, goldene Zeit und sinnverwandte Vorstellungen, Hildesheim (1967), 190.)。したがって、民話的な要素として「キュクロープス物語」にもともと内在していたことと考えられる。煙の立ちのぼるのを見て、漂流するオデュッセウスがその地へ寄せる熱い期待とかくあれかしとの願望のあらわれがその地の理想化と暗合していたのかもしれない。

(27) W.Nestle, Griechische Studien, Stuttgart (1948), 33ff. cf. D.Page, The Homeric Odyssey, Oxford (1966), 1f.; Treu, op.cit., 101f. Elliger, op.cit., 105.

(28) cf. Elliger, op.cit., 128ff.

(29) cf. Reinhardt, *op.cit.*, 74f.

(30) 「いずれかの神のお導きがあったのであろう」(9.142, 10.141), 「いずれかの神が憐れと思われたのであろう」(10.157)と, ただ幸運を当てにしなければ上陸もできず, 飢えを凌ぐことすらできない。それゆえにこそオデュッセウスはたえず見ていなければならない。それが帰国者の体験そのものであり, 「見る」に凝縮された体験である。

(31) 注(15)を参照。

(32) 注(29)を参照。

(33) 千田稔「不安な風景の時代」, 朝日新聞1984年6月13日付夕刊。

(34) cf. K.Hamburger, *Die Logik der Dichtung*, Stuttgart (1973), 35ff., 245ff.

(35) キルケー, カリュプソー, ナウシカアーはすべて一度は必ず *nymphē* とよばれている。キルケーとカリュプソーは, オデュッセウスが発する時に至ってそのようによばれる (10.543; 5.230)。

(36) cf. Elliger, *op.cit.*, 127f.

(37) Reinhardt, *op.cit.*, 77f.

(38) cf. Hölscher, *op.cit.*, 191f.

(39) cf. Hellwig, *op.cit.*, 39; Heubeck, West, Hainsworth, *A Commentary on Homer's Odyssey I*, Oxford (1988), *Comm.to* 5.297-387.

(40) Elliger, *op.cit.*, 453.

(41) cf. Treu, *op.cit.*, 102f.

(42) Heubeck, Hoekstra, *A Commentary on Homer's Odyssey II*, Oxford (1989), *Comm.to* 13.96.

(43) 岡道男『前掲書』 356頁。

(44) Heubeck, West, Hainsworth, *op.cit.*, *Comm.to* 4.354-9.

(45) 岡道男『前掲書』 349頁及び359頁。

(46) ここにアイロニー, それも *Selbstironie* を Reinhardt は指摘する (*op.cit.*, 68)。

(47) スキュレーとカリュプデイスの景観としての特色は, Elliger の主張するように (*op.cit.*, 145f.), いずれもホメーロスの典型的情景で,

ひとつひとつの描出そのものは、ほとんど『イーリアス』に類出する比喻と同質である。

(48) 第11歌の「ネキュイア（冥府行）」は、あらゆる意味から特殊なものと考え、本稿では一切ふれないことにする。 cf. Page, *op.cit.*, 21-51.; R.Merkelbach, *Untersuchungen zur Odyssee*, München (1969), 185-191, 209-230.; G.S.Kirk, *The Songs of Homer*, Cambridge (1962), 236ff.; Crane, *op.cit.*, 87ff.

(49) D.Page, *Folktales in Homer's Odyssey*, Cambridge (1973), 55f.; Merkelbach, *op.cit.*, 203f.

(50) たとえば 9.54, 85. cf. A.Kirchhoff, *Die homerische Odyssee*, Berlin (1879), 287.

(51) cf. Reinhardt, *op.cit.*, 67ff.; Treu, *op.cit.*, 107ff.